

特100

747

美太夫

辨慶

上使の段

御所様堀川夜討



国立国

10.

10.



始



将100

御所櫻堀川夜討

倭文範
御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

さゞめきいで給ふ、程もあらせず入來たるは、堀川御所に隠れなき、智仁勇の其骨柄、忠臣の龜鑑とは、唐土の豫讓我朝にて、其一人と號はれたる武藏坊辨慶、縁塗取つて打被ぎ大紋の袴踏折き、徐々として打通り、むづと坐して一禮し、ハトトラ



存じたとは違ふて、御顔色もみづくと、を機嫌の躰先安堵仕る、と申上ぐれば卿の君、
「ハ、我君様にもを機嫌能くおはしますかど、お言葉あれば武藏坊、
「ハ、其御仰の健さ、此と申すも侍從殿で夫婦ので介胞、を大切になさるゝ、
を苦勞の効ひがみえ祝着に存するよ、此はく、
挨拶で主人ながら、を平産ある迄は、我館に預る卿の君様、
義經公ので前幾重にもお執成ア、イヤく執成には及はぬ物事の執成といふは、かなれ

八合の事を、十分にいふが執成、此辨慶は其嫌ひみ九通りを罷歸り、眞直に申しなは、君にも嘸やを満足、
偕此はで夫婦への話でない、後學のため卿の君様へ御物語、
總じて勇士の戰場へ赴く時は三忘と申して忘るゝ事三つあり、
國をいづる時家を忘れ、
境をいづる時妻子を忘れ、
敵陣へ臨んで是我身を忘るゝ、
婦人懐胎も眞其の如く、
既に月満ちで産の緒を解かるゝは、
徠の敵陣へ駈入つて此ぞ好き敵を參なれ、
遁すまじと引組んで、
首を

どるかどらるゝか、良い子を産むか得産まぬか、
生きるか死ぬるか生死の境か、爰を能く合點な
され、豫てなき身と思召さば、其期に臨んで不覺
をとらぬ、ヤ拍子に乗つて馬鹿な事を、ハ、ハ、ハ、
借肝心ので内談遅なはる、爰は端近密々に御意得
たし、併し彼處に見馴ぬ女、アユリヤ何者た、イ
ヤあの者はわさと申して、此なる侍女信夫が母、
我家の奥勤も同じ事、憚りながらお隔意なくで
内談、アイヤ、彼を始め女中方、間を隔て遠慮

召され、サア君様、奥方、侍從殿、奥へ参らうか
イザお通りで案内ど、卿の君を誘ひて、侍從夫婦
は先にたつ、後に引添ふ武藏坊、鎌倉殿の難題を
つい打明けていはゞえに、暫く心奥の間に打連れ
件ひいりにけり、年若けれども利發者、信夫差配
し、一ノウ皆さん、何事ので内談、お隙がいら
うもしれまいに、お盃づきでもたしていの、チ、
ソレ、お煙草盆、お茶持つてゆくぞや其はお
慮外、序にお菓子も頼むぞや、さらばこの間に鳥

渡母様、此頃はお顔もみず、お懐しやと、立寄れ
ば、ハト「チ、其方も息災で嬉しいく、日暮傍に
引据ゑて、みれども倦かぬ一人子を、手放して置
く親心、親懐しう思ふより、百千倍とは知らぬか
や、假令で前の御意にいらとも、必ずく朋輩衆
を袖にすな、出かし達して嫉まるゝな、林の中で
も高い木は、風が枝をば折るぞとよ、一人寐覺の
度毎に、蓄めて置いた數々も、會へば嬉しうて口
へ出ぬ、何をいふも身を大事に、コレ必ず煩ふて

はしたもんなど、手を取交す親と子の分りなき風
情ぞ道理なり、稍あつて侍従太郎、奥より出づる
屈託顔、おわさ目敏く、ハト「これはく侍従様、
どうやらお顔の色も悪く、お氣の澄まぬで容躰、
で内談とは何事でムりますやイヤくさして氣遣
な事ではない、氣の浮かぬ事微塵もなく、心は浮
々勇んでをるはいハ、、、、エ、善悪に依らず身
が頼む仔細聞いてくれうか、コレハマア改まりし
お言葉、此身に叶いました事ならば、チ、過分く

其仔細と申すは別儀でない、其なる信夫が事以前
は何人の胤かは知らねども、見ればみる程、ハテ
美しい、ホ、、、ハ、、、トサ思ひし我は四十を
こえ、親たる汝が心にも、好色者と思はうが、拙
者信夫にイヤモ大執心と、聞くに親子は興醒し、
娘は母の後蔭小さうなつて身を忍ぶ、
レハく有難い、お言葉が進せましたら、マ何と
なされます、ハテ奥と定める、アノ奥様に、如何
にも花の井は暇遣つて、信夫を奥様にすると、語

る後に花の井が、聞くと其儘走出で、夫の傍に差
寄つて、ナニ私には暇を遣る、コレ申し、自も武
士の娘、何の科何の過失、サ、、、其譯聞かう、
イヤ黙りをらう、ヤコレおわさ、今聞く通りの事
儀なれば、愈よ信夫は貰ひましたぞや、否でムリ
ます、申し奥様、太郎様が如何様に仰有るとも、
貴女を去らせてそんならばと、娘を進せさうな私
と思召すか、女御后になるとても、道ならぬ榮華
を悦ぶやうなハイ私共ではムりませぬ、エ、何ぢ

ややら、悉皆氣狂の沙汰ぢやまで、ナニ氣狂とや
アイナア、アノ氣狂、ハアハツト夫婦は顔を見合
せ、暫く詞もなかりしが、稍あつて花の井は、狂
人とも見ゆるはづ、心は疾うから狂氣になつてを
る、其譯は、今日武藏殿參られし其仔細は、義經
公、叛逆人時忠の娘、卿の君を、妻と定めをるか
らは、是同腹中、又一味でなくば首討つて渡せと
鎌倉殿よりの難題、お幼少から夫婦の者が手塩に
掛け、育て上げた姫君様、そもやお首が斬らりや

うか何と又が當てられう、殊に平常ならぬお身の
上、辨慶殿も斬兼ねて、右つ左つ思案の上、お身
代りをたてまいか、ナ、其ぞ宜しきを分別、サ其
身代りは誰彼と、詮議の上、年の頃眉容姿、相應
した此信夫、不便ながらお身代りど、思ひ付いた
が信夫の因果、正眞の脊に腹とやら、コレ了簡は
あるまいが、夫婦の者の苦みを、思ひ遣つてと計
りにて、かつはと伏して泣きければ、夫も座した
膝を改め、一浮世の中の無心といふに、是に上

越す無心もあるまい、其返報には夫婦の者を、八
つ裂にもなされ、サ些とも惜まぬ、惜まぬ命は二
つあれども、一つも今日の役にたゝぬ本意なさ、
無念さ悲しさを、推量あれとはらく涙、始終の
様子聞く信夫、涙を押へ傍により、
「左様な事
とは存せいで、年に似合はぬ耻しらずと侮りしが
十年に餘る宮仕も、只た一日で奉公申しても、お
主様に異はない、不束な私でも、お役にさへ立な
らば、ア、ユレユレと物いやんなや、ハ

イ、イヤ申し此子は私一人で出来た子ではムリ
ませぬ、顔もしらぬ名もしらぬ、爺親がムります
ア、コリヤ、如何に狼狽ればとて、母親はか
りで出来る子が、三千世界にあらうかい、エ、其
上顔もしらず名もしらぬ、爺親を尋ねて手渡しす
るとは、何を證に尋ぬるぞ、ア、ノ、コ、ナ、僞者めが
子心にさへ主従の道を辨ふるに、エ、見限り果て
たる女め、娘を伴れて疾歸れ、サ花の井此方へと
立上る、
「ア、ウ、ユレ待つて下さりませ、僞り者

といはれては、親故此子の道立たず顔もしらず名
 もしらぬ、夫を尋ぬる證とは是と、上の一重を押
 脱けば、右は變らぬ詰袖に左りばかりが振袖の、
 濃い紅ないの染模様、橘ならぬ袖の香の、昔床し
 く忍ばしく、娘がさく前耻かしき昔話、
 故播州姫路の近在福井村、本陣の何某こそ私が父、
 母、十八年以前、頃は夜も長月、廿六夜の月待の
 夜、數多泊りの其中に二八餘の稚兒姿、此方に思
 へば其人も、擦れつ纏れつ相生の、松と松との若

縁、露の契が縁の端、ヲ、耻しや、つい闇夜の轉
 び寝に、無情や人の足音に戀人も驚きて、起きゆ
 く袖控ゆるを、振切り急ぎゆく拍子、断れて我手
 に残りしは此振袖、假寝の情は淺けれども、妹脊
 の縁や深かりけん、其月より身も重く、懐胎し
 一跡にて何と詮方も、産み落せしは此信夫、縁
 あればおそ子まで設けしもの、此振袖を知邊にて
 再び尋ね逢はんと、國を出で、十七年、嬰兒を抱
 え種々と、徨彷徨ひ回りし憂さ艱難、今に尋ね逢は

ねども、女の念力はこそは、娘よ父よと名告り合ひする其迄は、ハト「蚤にも喰さぬ大事の娘、お役にたてぬは右の譯、卑怯未練でない辨疏、ナ申しア娘には、さうぞお暇をくたさりませ、サ立ちや^く、サア立ちやいの、といへど立兼ね見捨兼ね親子心の隔の一重、誰とはしらず信夫が脊骨障子越し、ぐつと刺いて一割り、ウンと悶ゆる苦しみに、こはく如何にこは如何にと、傍でみる目の三人は、呆れ果てたるばかりなり、母は泣くやら

氣は狂亂、ハト「偕は夫婦といひ合せ、大事のくの娘をば、ようも残酷しい、サ、、、故の様にして返しやと、武藏に確と絶付き、泣くより外の詞なく、真中に辨慶どつかと座し、ハト「ユリヤ聲低に泣號をらう、是には深き仔細のあること、とこ吼ずと是見よと、押肌脱げばこは如何に、下着の衣の紅ないに、大振袖の伊達模様、ハト「ヤア其振そでは、サ、此片そでは其方にあるはづ、先年播州福井村にて人目を忍び暫時の假寝、偕は汝で

あつたよな、そんならお前が其時の、稚兒様かい
 な、チ、書寫山の鬼若丸た、ヒエ、スリヤ此むす
 めは眞實我子ぢやないかいな、チ、初て面みる假
 寢の爺親、殺したはお主の身代りたは、ヒエ、ハ
 アはつとばかり母親は、むすめの傍に走寄り「
 コレむすめ、アレ聞やつたかいのく、其方の爺
 御といふは、アノ辨慶様ぢや、といのく、サち
 やつくとで對面申し上げやいのと抱き起せば起
 されて、「
 母様何やら仰有るさうなが、耳が聞

えぬ、モウ目がみえぬ、必らず辨慶が傍にゐて、
 お前もころされて下さんすなへ、申しで夫婦さま
 親一人子一人の私に離れたよりのない母様、お見
 捨てなされて下さりますなへ、また折々には私
 も不便とおもひ、一遍ので回向たのみ上げまする
 こればつかりがといふ聲も、次第く逼迫りき
 て、敢果なく息は絶えにけり、母は死骸をいたま
 しめ、可愛やくく可愛いやな、これいのうコ
 レ信夫、今一度物をいふてたもいのく、これが

此世のわかれかいのうく、いふて回らぬことな
 がら、脊長伸びるにしたがひて、唯父様に逢ひた
 いと、したふ子よりも此母が、切望逢ひたいく
 と、たづねさまよひ國々を、めぐりくつて今こゝ
 で、逢はぬがましであつたもの、死ぬる今はの際
 までもまことの父としらずして、母を庇護ひしこ
 ころ根が、いぢらしいやら悲しいやら、この胸を
 裂くやうなく、わいなあ儲もく、淺猿しや、いか
 なる因果なうまれ性、おなじ殺す道ならば、たが

ひに父よ娘よと、名告り合ひした上ならば、此思
 ひはあるまいもの、浮世に心のこるであらふ、こ
 ればつかりに引かされて、三途の川と死出の山、
 まよふてたもんな迷はぬやう、みちは遙々一筋ぞ
 や、のりの光りや燈火の、影を力にとほくと、
 歩むすがたが目のさきへ、今みるやうに思はれて
 可愛いはいのとばかりにて、むなしき死骸をいた
 き締め、聲もおしませ泣るたる、辨慶なみた押隠
 し、最前より一と間にて、なんじが話聲とひとし

く、さては我子と飛立つばかり、生も顔もみたか
 りしが、なまなか見つ見せては、未練なこころも
 起らんかと、腕に任せて忍ぐりしもの、何一とた
 まりもこたへうか、我うまれてより此年まで、あ
 どにも前にもコレを夫婦、たつた一度でござつた
 ア、はてしんどうな事をして、うまれし我子と聞
 くよりも、憎からうか可愛かるまいか、其様に泣
 くを見て、太郎夫婦のるやらずば、と泣くより泣
 かぬくるしみに、ナコリヤ鳴くせみよりも却々に

鳴かぬはたるの身をこがす、小歌も我身にしられ
 たり、これに付けても親の恩、いまとり分けてお
 もひしる、唐士の樊噲が、母の小袖の母衣となづ
 け、戦場まで持たりといふ、それを學ぶにあらね
 ども、その下着は母の手づからくたされしを、な
 んじに片袖取られたれども、亡き母に添ふ心地し
 て、縫ひも直さずふりそでの此儘、四國九國一の
 各々へも、押立てく、危き難をのがれしも、こ
 れぞまことに親の陰、年月かさね肌身放さず持ち

しゆえ、名もしれず顔もしらぬ親と子の、しるし
 となつて十七年目にめぐりあひ、主君の絶体絶命
 の、大事のお役立てたること、ひとへに亡き母の
 たまはりし此小そでに手を通し、おや子一所に引
 合せ給ふとは、ハ、ハ、ハ、ハ、廣大無邊の親の慈
 悲、チ、よふ死んだ、出かしたなど、いひつゝも
 息あるうち、われこそ尋ねた父親ぞとこの面でも
 見せたらば、さぞ嬉しからうもの、これはつかり
 が残念と、まぶちで拂ふつゝみ泣、侍従夫婦がも

らひなき、四人はなみた八つのそで、八つの時計
 にうち交せて、産れたときの産聲より、ほかには
 泣かぬ辨慶が、三十餘年のためなみた、一度にみ
 たすぞ果しなき、武藏はこゝろ取直し、南無三は
 や八つとき、サア太郎殿、卿の君の御首討つてわ
 たされよ、チ、心得たりと信が死骸ひき寄せて
 あへなく首を打おとし、かへす刀でわが弓手の小
 脇にがはと突込んだり、ひとくこれはおぼろ
 けは、ヤレさわぐまいく武藏殿、わが切腹を合

點まるらんか、卿の君の乳人とは、鎌倉どのも知
 ろし召したる、侍従太郎がこの首を、添へてわた
 さば、天地を見洞く梶原も、身代りとはよもいふ
 まい、未れんな女房、見苦しきそのはるづら、萬
 事武藏どののさし圖をうけ、おわさ諸共で平産の
 あとくまで、こころをつくるが夫へ貞節、ユリ
 ヤこころ得たかなくな、アイ、なくな、サア
 武藏どの時うつる早く、チ、合點とぬきはなし、
 ひらりとみえしかたなの影、首はまへにぞおちに

ける、たちなほつておほをえ上げ、
 門前にひかへしものども、たしかに聞け、卿の君
 のおん首侍従太郎二つの首、たゞいま受取りたち
 かへると、それとしらすも胸あつて、やかたへ響
 くばかりなり、すぐにたもとを押切りく、二つ
 の首をつゝむにあまる目に漏るゝ、なみたになけ
 き果しなく、さらばくと、首を左右にかきいた
 き立あがれば、ユレノウ暫時と取附いて、われは
 未來の約束せん、われは親子の一世のかぎり、と

もに名残にいま一度、なきがほみせてたべのうと
嘆けどしたへを焦るれど、こゝろづよくも振捨て
し、見せぬもつらし見ぬも憂し、かへらぬ道にあ
こがるゝ夫のわかれ、二つのなげきを一筋に、見
すてゝ御所へぞ三重「たちかへる、

辨慶上使の段

百人一首	新しん文句大津系ぶし	薩摩琵琶歌
劍舞	流行追分ぶし	琵琶歌集
滑稽一口ばなし	新版角力じんく	軍歌大全
滑稽落しばなし	新版あはたら	経學校の唱歌
新版さのさぶし	義太夫さわり集	浪花節大石内藏之助
詩入掛合さのさぶし	新版ごゝ逸集	浪花節神崎與五郎
新版くささぶし	文句入ごゝ逸集	浪花節前原伊助
流行浪花ぶし	チヨイトネぶし	浪花節赤垣源藏
新版祭文ぶし	ドンくぶし	浪花節横川勘平
詩入流行ラッパぶし	考物博士	浪花節大高源吾
詩入掛合ラッパぶし	なぞく	浪花節堀部安兵衛
新派こわいる端	うた	集浪花節倉橋傳助

大正三年十一月三日印刷
大正三年十一月八日發行

大義
夫太
字

編輯者兼 東京市淺草區三好町七番地
大川 錠 吉
印刷者 東京市淺草區南元町二十六番地
川 崎 清 三
印刷所 同 所 大川屋印刷所

發行所

東京市淺草區三好町七番地
大川屋書店
(電話二五七三番、郵便東京四〇〇九番)

MADE IN JAPAN.

終

